高橋作左衛門

加夷考證

全

特別
ル2
3389

帝國圖書館藏

北東考證

高橋景保 撰

景保嘗ニ輿地總界図新製ノ命ヲ奉ス茲ニ於テ
西刻地理諸編諸図ヲ発下シ且予亦他ノ所蔵ノ諸
図諸說數本ヲ購求シ互ニ參校シ其尤モ正覈的實
ナルモノヲ取テ新訂ノ一図ヲ製ス其中我屬島カ
ラフト島ノ図ニ至テ大ニ窮スルモノアリ コレ所
屬ノ近島トイヘドモ我方ノ人未タ嘗テ其奥ヲ究メ
ス但西刻諸図ニハ此都位ニ於テ「ザカリン」ノ名ア
リ然レドモ其地形ト大小位置且其島或一或二諸図

59 7542

各異同アリ　尤其命名ノ義ニ於テシモ未ダ詳ナラ
ス因テ意ヲ潛メ心ヲ用ル「ヿ」茲ニ二年蓄念ノ久キ
一ニ得ル所ノモノアリ　左ニコレヲ採録メ考證ニ
充ツ　後ニ五回ヲ設テ検閲ニ供ス

○嘗テ聞ク蝦夷地ソウヤ」ノ北ニアタリ海峽ヲ隔
ル大地ヲ松前人從来カラフト」ト称ス「カラフト」ハ
唐人（カラヒト）ヨリ称ル邦墨俗異邦ヲ汎称ス「カラ」トイフ」
ト」トハ北人「ヒト」ト云フノ訛ナリ　何ヲ以テカ「カラ
フト」ト称スルトイフニ彼ヨリ漢製ノ諸品ヲ携来
ルモノアリテ　コレヲ「サンタ」トイフ由シ　本邦人
山丹ノ字ヲ填テ通称トナセリ　按ス

ルニ近藤氏蝦夷分界図考曰山丹ノ部落ハ「カラフ
ト」ノ奥ニ「マンゴ」ノ大河ノ河口ヨリ「サンダ」「ギチイル」
「チヨホツト」辺マデニ居ルト云ヘ後第二図ニ視ル
ニ黒龍江口ノ北辺ヨリ其江ニ注ク小河アリ　地邊
河トイフ恐クハ山丹ハ此訛ナラン歟又寧古塔ノ
東ニ地達山アリ然レハ水牧果メ其正覈ヲ知ニス
ソウヤ」ノ夷人ト交易スル「年久シ其齎ス所ノ品
物ハ所謂シヤツトク（拾徳）コレ松前ニテ呼フ所新下ニテ「エ
ゾ」ニシキトイフ山丹語ホウトウ
ダンギレ」ムシノス靖煙管　山丹語チヱアイ　ノ類種々ナリ
漸クコレヲ本地ニ傳フ　コレ我夷種トハ異ナレル
人ヽ持来ル故ニ江差松前ノ商賈ドモコレヲキヽ
愛テ泛然トメ「カラフト」ト呼フコトニナリ終ニ其
北夷ノ地名ノヨウニナシタルト見ヘタリ　固ヨリ

彼ニ渡海モナサヽレハ其涯際ハ極メス唯カラフ
トくト称スル丁ニナリ来リシ丁トキコユ（諸國ノ地名ヲ）
ナス原ヲ譯レハ此ルイ尤多シ　近時開拓ノ丁アリテ二三回点検
ノ人々ヲ遣レシモ未タ其地ノ限奥ヲ究メズトキ
ケリ今茲文化六年己巳秋七月此地ヲ新タニ北蝦
夷ト称スヿ可キノ命アリ故ニ予此編ヲ北夷考證
ト題スルハコレコヽニ由ル所ナリ　私カニ「カラフ
トレ」ノ名ヲ新譯セハ外人来市国トイハンカ如シ
○西洋諸国製スル諸国ニハ皆此一島ヲ「サガリイ
ン」トイフ名ヲ託ス（魯西亜人国ヨリ此地ヲ「サハリ
ン」ト称シ近辺彼等直ニ其地
ニキタリシ時ノ書中ニモ「サハリン」ト託ストイフ）但其何ニ因テ斯ク呼ヘ
ルニヤ未ダ詳ナラス
△按大清一統志寧古塔（メンクタ）部ニ云大洲在城東（按城ハ即寧古塔城ヲ云歟）三千餘里混同江口（按薩哈連江口）之東大海中南
北三千餘里東西數百里距西岸近処僅百里許ト
見ヘタリ其大洲トイヘルモノ恐クハ「カラフト」島
ヲ指スニ似タリ
△盛京通志曰黒龍江ハ即薩哈連江薩哈連者黒也
（諸沙記署示同）金史曰混同江一名黒龍江水微黒。混同
源ハ出長白山ヨリ舊名粟末江。遼以為混同土人呼称

阿里。云ヒ

○此等ノ書ニ因テ考ルニ薩哈連ノ本音「サハレン」ナレハ此河ノ大海ニ注ク東方ニアルノ地ナルヲ以テ「サハレン」ト謂ヘルヲ満洲人呼ヘルヲ西洋人変ケ傳ヘテ嘗ノ名トシ国中ニ「サガリーン」又サハリンレナド記ノ各国ノ通称トナレルニハアラスヤ

○或人蔵スル所清朝乾隆年間所刻十六省及九邊図ト題セル大幅一軸アリ官コレヲ暦局ニ命メ摸写セシメ地理考覈ノ一帖トナス景倶等コレヲ閲スルニ漢土製輿地諸図中彼ノ清會典盛京通志清一統志等載スル所ノモノニ比ス可ラサル精詳密細ノ図面ナリ其中殊ニ異シム図中皆経緯天度ヲ引線シ各州各郡北極高度ヲ測量スル丁分明ナリコレ余等未タ嘗テ漢製時来ノ地図ニ見サル所ナリ但憾ラクハ序説凡例等ノアルナク並ニ印鐫ノ年暦等ヲ載セス是少散脱スルモノナラン或人云按此国漢刻ニヲ世ニ流布スヘカラサルモノクルヲ以テ何者ノ點児カ予例等ハコレヲ除キ去リ其国ノミヲ取出シ奇貨ヲ得ントメ偽ル船載メ本邦ヘ傳ヘタルカモ知ルヘカラス彼官府秘図写本ヲ以テ彼方ニ轉輸スルモノ亦其類多ケレハナリト

右題名乾隆年製トイフモノハ唯儲蔵ノ本主匣面ニ書スルニ依ルノミ

恐クハコレ清商船載ノ日傳譯ニ出シモノカ尤當
時載来此一部ニ止ルヘシ實ニ一珍書ト云ヘシコ
レ 宮匠等ヲメ謄寫ノ命アル所以ナリ其國中亦黒
龍江口ニ對メ一大島ヲ國ス但沿岸ノ地名一二ヲ
記メ今地ノ名ヲ書セス其位置ハ西洋諸國ニ出セ
ル「サハリン」ニテ其地形方位我「カラフト」ノ如シコ
レ亦國ニ附スルノ序例等ヲ脫スレハ果メシカル
ヤ否ヤヲ辨セス

△項閲蔣良騏所撰東華錄曰康熙五十八年二月
諭以閣學士蔣廷錫皇輿全覽圖朕費三十餘年心
力始得告成山脉水道俱與島貢相合云〻
因テ思フニ前國ハ即コノ皇輿全覽圖ナランカト
始ク後ノ考料ニ充ツ仲秋一日在局ノ和蘭訳生馬
塲貞由ト西洋地輿ノ書説ヲ會講ス貞由偶〻西士ピ
ートルホンデルナル者所撰訳名萬國圖記 全部十五冊 曆数一
千七百五十年ノ印行ニコレ 支那韃靼ノ篇中ニ於
ル 寛延三年庚午ニ當ル
テ一説ヲ得タリ其詳ノ如キハ貞由訳ス所ノ
野作雜記餘考中ニ出セリ
讀シ從テコレカ譯草ヲナス

△譯文曰支那ト魯西亜トノ間 魯西亜韃靼ハ常ニ往
来絶ルヿ無ク結歴スルモノ頗ル多シトイヘモ

各地ノ位置方向等ヲ測定スルモノナシ　特掃部
察国ノ「ヨスウイツト」即葡萄牙ノ人ゲルビヒル黎児弼尔倫ナル者親視
密測メ新ニ図ヲ製セシモノアルノミ　是一千六
百八十八年　我元禄元年戊辰清康熙二十七年　支那帝ノ託命ニ因
テ彼韃靼而靼ノ諸ヲ遍歴シ親ク測量シ詳ニ絵図
シ精細ニ其支ヲ密記セリ　世ノ新説新図ヲ好ム
ノ徒其精図アル事ヲ聞テ視ントヲ希望スルモ
ノ日久シ最後暦数ヲ儒法尔的ナル者コレヲ世
ニ公ニス仰行セシ　蓋此地図如キハ彼「ヨスウイツ
ト」ノ密測ニ出ルモノニメ悉皆信用スヘキモノ

ナリ
又曰其五年前　按一千六百八十三年我天和二年壬戌清康熙二十二年　支那
ノ帝「カンギ」即康熙　西士「ブルビーストル」ヒ児鼻斯多ヲ率ヒテ自ラ
東西韃而靼ヲ週歴巡覽セリ　然レトモ此時ハ唯其
風土ノ「ト」帝王ノ親ラ視タマヘシ支ノミヲ聊
カ畧記メ精詳ノ「ニ」及ハスト云フ
○コレヲ讀テ之ヲ思ヘハ前図ハ愈々康熙帝ノ託
ニ因テ西洋人ノ手ニ成ルモノ歟始メ異ム分度測
定亦タ清人ノ成サヽル所ナリト尔後乾隆御製詩
ニ集中ヲ見ルニ

△題輿地図詩曰拓地多年仰聖猷註輿地図自康熙年間皇祖命
人来傳諸各部詳詢精絵而後定或有不能身履其
地者必用諸博物方而獻之既成鏤板垂諸永久
覆奏今復遠渠搜註上年平定準噶爾迤西諸部悉
入版章因令部御史何国宗二率西
洋人由西北兩路分道至各鄂托測量星度占候節
気詳詢其山川之險易道路遠近繪図一二如舊製
トアルヲ讀テ其率西洋人云々ナルモノハ前譯ノ
禁児(ケルル)弼尔(ピール)崙(ストン) 弗児(フル)鼻(ピー)斯(ストン)多ノ中ニノ前国ハ拂良察
国「ロスウイフトL」ノ手ニ成ルヿ疑ナシト知レリ葉児
弼尔崙ノ適歴ハ康熙二十七年ト譯説ニ見ヘタル
ハコノ詩註ノ康熙年間ト云モノナルヘシ 五十八
年二月ノ諭文映貴三十餘年心力アレハ帝志ヲ
起スヿ康熙二十餘年来ノヿナルヘクメ全ク右譯
説ノ年暦ヲ符合ス
○又按ニ其康熙二十七年云々ト譯説ニ云モノ東
華録ニ見ヘス但東華録中康熙十七年ヨリ四十年
ニ至ルマテヲ概讀スルニ曰ク
康熙十七年十月上巡視北邊(ピートルホンデ 蒙国国記中不載)
同二十四年六月上巡幸塞外(蒙国国記曰康熙二十一年帝親西土「ピーストL」ヲ率テ東韃靼ヲ巡視ス又曰二十二年復西韃靼ヲ巡視ス見廷前此両年何レカ一ハ二十四年ノ誤ナラン)
同二十八年十一月定鄂羅斯邊界ノ大碑於格尔必

齊河勒滿漢及鄂羅斯喇第彼「ラテイン」ナリ地名ニハアラス　西洋古
語ニノ和蘭拂良蔡　蒙古ニ以上　蒿国国記　曰此年西
意大里亜音ノ諸国通用ス
洋七月ニ當テ西土「ゲルビルロン」ニ至ル　茲年支那魯西亜ト和
テ「アルツシンスク」ト「アムル」河ノ北ニ流ル、小河「ゲルビシ」
睦ヲナシ　「アムル」碑ニ記スル所ノ文字ハ韃靼
ノ辺ニ界碑ヲ立ツ　支那魯西亜交剌向等
ノ字ナリ云ヘ
同三十年四月上親巡蔡邊外蒙古編立哈尔哈七旗
真四十九旗等五月癸卯上回宮　蒿国国記曰茲年西洋五月九日帝
親西土「ゲルビルロン」ヲ巡視ス云ヘ　又諸侯ヲ率テ「カルカス」
○按ニ「カルカスし」ハ東華録ニ云喀
函哈ナリ　○又曰次年九月八日再其地ヲ巡視ス
同三十四年八月上巡塞外　蒿国国記不載

同三十五年三月丙辰上親征厄魯特噶尔丹大軍
啓行　蒿国国記曰茲年西洋四月二日帝親西土「ゲ
ルビルロン」及其子ヲ率ヒテ「ツアハンノル」ヲ
巡視ス　○按ニツアハンノルハ前回所謂賽桑ナリ「ノル」
ハ満洲湖江ノ義　○又曰同年八月十四日　又西土
「ゲルビルロン」ヲ其兄ヲ率テ再ヒ塞外ニ至ル
同三十六年三月丁丑駐蹕寧夏　按甘南ノ内即寧夏衛　閏三
月乙未上自寧夏城往白塔云　蒿国国記曰茲年
日帝親太子ト共ニ「ニンヒヤ」ニ至ル云ヘ　即寧夏
ヤリ如此畧ヘ各合ス　西洋二月二十六
此漢蛮両書ヲ併出メ后ノ考合ニ　此事此書ニ襲預カラストイヘ
ミナランカト亦蛇足ヲ添フ
原本ピートルホンデ」カ書ニ載スル支那韃靼ノ図
後ニ模ス　第三図　ハ即右ノ葉児獅尔崎ノ製スル所ナリコ

レ前図ト比校スルニ全ク同フメ分毫ノ差ナク但
漢字ト蛮字トヲ異ニスルノミ念ヒ蓋シ西人ノ製図タ
ルヿ明白ニ即漢製ト蛮製トノ両図ヲ模写ノ後ニ
出シ其同図タルヿヲ證ス
○前図ヲ備蔵スル者ハ乾隆年製トノミ久ク收メ
傳ヘテ其由来ヲ知ラス今亦東華録乾隆詩ノ註文
ヲ讀ト雖モ幸ニ此譯文ノ一説ト編中ノ左図トヲ
得スンハ何ソ漫リニ安ク證ヲ取ルヿヲ得ンヤ地ハ
海外数萬里文ハ蠕脚横行年ハ既ニ二百餘歳ヲ経
テ當時當山人為ス所ニメ其傳記ノ別ニアルナク
未タ得テフレヲ考フヘクラサルモノ今ニノ我
東方ニ於テ此辨別分明ヲ得ルヿ奇トイフヘク安シ
ニコレ太平ノ餘化ナリ官本撰寫図ヲ收ル匣中此考證一冊ヲ添フ
○前図嘗テ譚ス其図畫及細楷ノ精巧縝密尤驚怪
スルニ堪ヘス是安ニ西刻銅版ニ減セストコレ宜
ナリ元ト西刻法ニ從フヿヲ又近コロ始テ乾隆集ノ
註文ヲ讀テ知ル既ニ成鑄ヲ以テ銅版ニ金鑄永久ニトアレハ
恐ラクハコレ銅版ノモノカ但其枝ハ精其巧
ハ密ナリトイヘモ就テ熟視ヲナセハ木刻ノ如キ
ニ似タル事アレハ若シクハ銅ニメ木版ノ如ク彫

刻セルモノカ又コレ木鏤ニノ別ニ銅版ノモノハ
アルニヤ果ノコレヲ立ムヘカラス 頃亦或人ニ聞
蔵家尚又別ニ如此一国ヲ蔵セリ予嘗テ是ヲ視ニ
ニ即コノ十六省九辺ノ国ニ同ク尺ノ度数ヲ引線
シ且地名ヲ記セルカ如キ細楷精密ニメ銅鏤ノ如
シ但前国ニ比スレハ稍小ニメ二面トナセリ 左其
国初ニ序文ノ類アルヲ見タリ然レモ惜ラクハ當
時其題名ヲ失ストナリ 是恐ハ皇輿全覧図ニメ所
謂銅板ナランカ 因テ予是ヲ閲テ其国ヲ看ント欲
スルヿ切ナリ 若シ幸ニ一トタヒ此国ヲミルヿヲ
得ハ尚詳ヲ 又西士「ヒブ子ル」ナルモノ萬国図誌原名
得シ
「ゼログラフヒ」全部六冊一千七百六十九年
刊行 我明和六年己丑ニ當ル 中一覽ヲ
得タリ 即コレヲ抄譯ス

△譯文曰支那帝ノ命ニヨリテ「パートル」按僧官名首座

トイフカ如儒花尔的按前訳ニ見ヘタル支那韃靼ナ
シト「デュハルデ」韃ノ地国ヲ公行セシ人ニ
ル者製シタル支那韃靼ノ全図三葉及分図四十葉
アリ尤信用スルニ足ルモノ也云〻
前譯最後ニ儒法児的世ニ公ニストイヘルモノト
符スコレ乾隆年間ニ至リ本国ヲ印鏤セシメタル
「ニモアルカ此説ニ云フ国ノ葉數ハ右ノ如ニメ
前図ハ通計三十二葉アレハ同国ニメ其刻ヲ異ニ
スルモノナランカ是亦或ハ前文ノ註ニ云フニ帖トセル国ナル 次
○右ピートルホンデ」図説中即サハリン」ノ事ヲ記
ス以テ考證トスヘシ即コレヲ左ニ譯出ス

△譯文曰「サハリヤンウラアンガ」邊ノ土人巡檢
異客「ヨスウイツト」前ニ註スニ語テ曰サハリヤンウラ
「アンガ」ノ對向ニ一大島アリ其土人皆吾輩ノ風
俗ト同シト後文那帝コレヲ聞キ即「マンチュ」人ヲ
メ其島ニ到らシム「ムンチュ」人命ヲ受テ「サハリヤ
ンウラアンガ」ノ河岸ニ至リ彼島ノ地理ヲ知リ
タルモノヲ徒ヘテ其島ニ渡レリ其地多クハ食
料ニ乏キヲ以テ彼等全島ヲ廻歷スルヿヲ得ス
尤測量ノヿニモ及ハス但地名ノ如キモ其實驗
セシ處ノミヲ聞知リテ飯レリ故ニ島ノ南方ノ

如キハ固ヨリ図スルヿ能ハス唯土着ノ島人云
フ所ヲ以テ推メ図ヲ成セルノミ「サハリヤンウ
ラ」近傍ノ土人ハ其島ノ小地名ヲ取テ漫ニ全島
ノ名トス故ニ其呼フ所數名アリ其中多クハ總
テ「サハリンウラアンガハタ」後ニ解ス ト呼ヘリ
蓋薩哈連ロノ島ト云義ナリ又其嶋ニ往キタル
「マンチュー」人等「ヨスウイツト」ニ語テ曰彼島ノ中ニ
馬及他ノ獸類更ニナシ唯「ヨラント」接滿呼俄倫唐太ニテハ
「ツナカイ」ト名ク形鹿ニ似テ角數枝ヲ分ツ其角
身ヨリ大ナルアリ書西亜示「ホレン」ト云ヒ清人
馴鹿ト名ク數種ヲ處々ニ於テ見タリ土人此獸ヲ馴

擾ノ雪車ヲ牽カシム

○保退テ乾隆御製清文鑑ヲ按ニ（サハリヤン）ハ黒（うう）ハ江即黒龍江ナリ（アンガ）ハ口（ハダ）ハ岸ト譯セルモノニメコレヲ連称スレハ薩哈連口岸ノ義ナリ　西人薩哈連河口ノ島ト譯セルハ誤ナリ　島ノ「ハ」滿語ニ「達」ト云ナリ　意フニコレ哈達岸トイフモノハ江口ヨリ嶋ノ山峰ヲ望テ其地ヲ泛称セシ名ナルヘシ

モトコレ全地ヲ廻暦スル「ヲ得ストイヘハナリ

且其地図ヲ見ルニ滿人等近傍ノ小島皆何某「ハダ」ト称スル名多ク見ユコレニ因テ考フレハ其今土

ニハイタラスシテ其島山ノ突起セル処ノミヲ遠望メ称スルモノミナ哈達ト呼ト做スト見エタリ　右支那ニ入リシ柿郎察人コノ名ヲ聞テ其製スル所ノ地輿図ニ「サハリヤン」ウラ「アンガハダ」ト記セルナリ　後他コレヲ聞クモノハ滿語ノ本義ヲ解セズ「サハリヤン」ト云上頭ノ誤ノミヲ覚ヘテ下ノ二三訣ハ暗ンヒス　殊ニ「サハリヤン」ヲ轉訛メ「サガリー」シレ又サハリン」ナトノミ唱ヘ島ノ名ト意得各国製スル所ノ諸図皆此島ニハ「サガリン」トノミ記シオケハコト、知ラシ如何ニメカ既ニ西洋人等此島

ヲ「サガリーン」ト称セシト疑念久シカリシニ柳郎察人ヨリ傳称セシ「今日ニメ氷釋スコレ亦奇ト云ヘシ但此名モ亦彼カラフト」ノ類ニメ的称正名トナスヘキモノニアラス蓋蒙国各地開拓ナキ未分ノ時ニ在テハ別ニ名ト云モノ有ラナクコレラノ類ノ漫称ヨリメ本名トナルモノ勝テ計フヘカラス此島今ハ満語ヲ以テ諸蛮通称ノ名トハナリタリ偶我国ノミ此名ヲ称セス蓋清會輿地全図ニ此島ニ阿党吉山ノ名ヲ命ス清文鑑ヲ按スルニ阿當甚多多ハ幾時ト云フ義ナリ恐ラクハ阿達期多多ノ誤ナルヘシ阿達期ハ満語隣ナリ然レハ即隣山ノ義ナリコレ亦泛称ト云ヘシ若鐸説ニ「マンチュ」土人彼嶋ノ小地名ヲ取テ本島ノ名トスルモノ多シ故ニ其呼フ処数名アリト云モノニ符ス但シ此国前国トモニ同一国ニメ地形モ地名モ共ニ西北ノ端黒龍江口ノ方ハ取ルヘクメ其餘ハ推察ノ図形ニメ證トシ取ルヘカラサルモノナリ但其説ノ如キニ至テハ略見畧之トイヘモ極テ実説ニ近キ亦之ヲ発明スルモノアリ次ヲ逐テコレヲ辨スヘシ

○又ヒブ子ル「見テ前」萬国図誌第五巻亦其紀アリ譯

スレハ即如左

△譯文曰「サガリーンアンガハタ」此島ハ「アームル」一名「サガリーンウラ」河口ノ前ニアルニ因テ拂郎察人呼テ「イスレス・ボウセ」ト云按ニ「イスレ」ハ島「ボウセ」ハロノ義ナリ滿語即チ「アンカ」ナリ「サハリヤン・ウラ・アンガ・ハタ」ノ異称ナリ千七百二十八年 我享保十三年戊申 魯西亞人此島ニ於テ創メテ真珠ノ猟ヲ業シタリ然ルニ此島固ヨリ支那韃靼ニ屬スルモノユヘ清人コレヲ停止ヨリ二ノ嶋中ニハ大抵香ノ産多シ又許多クノ狐ヲ猟スヘシ世ニ地図多シトイヘトモ此島ノ全状ヲ図盡シタルモノナシ唯支那韃靼人「アンヒルレ」ノ著述ニソコレヲ和蘭ニ於テ「シウキウレール」ナル者刊行シタルモノノミ

按ニ拂郎察人「イスレスボウセ」ト名ケシモ滿名ヲ譯セシ名ナリ又拂郎察人モルチールノ国ヲ按ニ此島ノ一名「イスレスフレウウエ」ノイル」ト記セリ「イスレス」前説ノコトシ「フレウウエ」ハ河ナリ「ノイル」ハ黑ナリ直譯メ黑河ノ島トム義ナリ是亦右ニイフ如ク彼サハリヤンウラ」アテ到リシ拂郎察人エスウイツトノ譯名ナルヘクメ西洋人此地方ヲ明スノ原タルヿ知ヘシ支那韃靼人「アンヒルレ」ト云者著セシ此島ノ全図アリテ和蘭刊行ア

リト云モノ亦後第二図乾隆年製及ビ第三図中ノ図ト
同図ナラン蓋シ「アスウィツ」ハ此島ニ至ラサレハ
第二第三図中ノ北野作図ハ彼カ製ニアラス乃前
ニ「ピイトル」ホンテ」譯文中ニ所謂支那希マンチュ人
ヲメ此島ニ至ラシムト云モノ即此支那韃靼人「ア
ンヒルし」ニメ亦此図ヲ製セシナラン 彼ト此トヲ
讀ヲ其人名ニ至ルモ明スニ足ヘリ
○サガリーン島ノ図西洋及清人製スル所ノ輿地
図數品各其地形ノ位置方向大小廣狹正シカラス
且此サガリント島ト我呼フ所ノ「カラフト」島ヲ分

テ多クハ二島トナセリ唯第二図第三図ノ如キハ
一島トナストノヘ尼南方ヲ尽サス近歳将来スル
所ノ西洋製図モ皆倣洲及ビ北野作地ハ此二図ニ
由ルモノナリ然ニ近時官物御蔵トナル所ノ諸厄
里亜図アルロウスミフトしナル者新製輿地図一葉
アリコレ彼ノ一千七百八十年我安永九年庚子製スル所
地球全覽ノ方図ナリ古今舶来諸地図中コレヨリ
精ナルハナク又新製ナルハナシ何ントナレハ彼程
未不分明又未審ノ地方ノ如キモ尽ク明瞭シ其航
海実験セシ者ハ其行海ノ針路ヲ引徧シ其年月ヲ

倩記シ各土地形ノ出没方位等ヲ改正スルノ類其
詳ナル「ケ」等テ計フヘカラス 蓋シ古今獨歩ノ精図ト
魯西亜人モ又是ヲ珍重ス 其図中ニ載テ国船始テ
行海セシ針路ヲモ相補テ引線セリ 予等往ニ魯西
亜都製スル処ノ地図ヲミルニ尚未タ詳ヲ尽サス
頃天明四年甲辰ニ當テ本国製スル処ノ図ヲ見ル
ニ北蝦夷地ヲ載スルモノモ大ニ誤レルモノニメ
尤モ取ニ足ラス「ヒブチル」ノ説ニ享保十三年始テ
此島ニ渡リテ真珠ノ獺ヲ捕ナセリト云モ黒龍江口
ノ一端ニ来リシナルヘシ コレ本ト自国ヨリ事ウ品
方航海ノ道ヲ開キシハ僅ニ七八十年来ノ「トキ」
コユレハ其詳ヲ殺サル処ナリ 其説別ニ譯セルモ
ノアリ爰ニ贅セス 宜ナリ諸厄里亜人ハ欧羅巴洲中ニ於
テ殊ニ航海術ニ專精ナル「」他方コレニ法ルモノ
多シトキケハ之景保恭シク 命ヲ奉メ總界全図
ヲ新製スル特ニ此図ヲ主トメ他ノ數今諸図ヲ其
按覈ニ充ルナリ 元此図中ニハ獨リ我北蝦夷ト云モ
ノト「サガリーン」ヲ以テ一島トナセリ 新古ノ図未
タ見サル処ナリコレ原ト安ク験ニ出テ其證アツテ
コレヲ為ス処ナリ 若シ舊図右ノ如キヲナセルノ
実證アラハ何ソ如斯ノ校訂新製図ニメ漫リニ改
メテ一島トナサンヤ 是即一同島ヲ是ノ一證トス 後ニ其図ヲ出シ
示ス第四図コレナリ 但サハリーン一名「ツオカ」ト記
セルモノハ恐ハ一村名「テツカ」ノ誤ナルヘシ
○我所謂北蝦夷 即カラフト 彼称スル「サガリーン」尤一

同島タルノ正證コヽニアリ文化五年戊辰春間
宮林蔵松田傳十郎カラフト」按検ノ命ヲ奉メ彼
島ニ至ル略ニ周廻メ其尽頭ニ近ツキ到ル「マンゴ」ニ（樹スル地）
ナリ「マンゴ」ハ山丹及夷人呼フ所ニシテ即黒龍江
ナリ 按ニ狄等備測地「マンゴ」モ或ハ「満河」ト云シ
即チ漢音ナリ 然レハ此「マンゴ」モ或ハ満河ト満人
呼ヘルモノヲキケルノ輸訛セルナラン 按
其夏松前ニ皈リ其実験ノ図ヲ製メ奉ルモノアリ
予愛テコレヲ視ルニ未タ尽サヽル所サカラスト
イヘトモ剖判以来其境界ヲ尽ヒル「此者等ヲ以テ
最初トス且是悉皆実験ノ事ニメ異邦トイヘ
トモ如斯固流セシ「ハ未タ嘗テナキ所ニメ以テ実
證トスヘキモノナリ第五図コレナリ 其未タ尽サヽル処アリ
ト云ハ未其地ノ東北ヲ漫マス且別ニ測器ノ撫
ルモノナク唯一小地平径儀ヲ帯ルノミ故ニ其方
向ノ大累ヲ測リ里程ノ如キモ自ラ歩数ヲ取リ或
ハ土人ノ傳説ニ従フ歩数ヲ以テ星度ヲ
測量シ縄索ヲ以テ里数ヲ計ル等ノ「ニ及ハサル
「ナリ可惜「ニアラスヤ亦復命ヲ承テ其秋ニ及
テ再行メ此歳己巳（秋北蝦夷半途「トンナイ」ヨリ余
ニ贈ルノ図考アリ 但前年十二月彼地ヲ発ス此図
共ニ信ヲ取ルヘキ
モノ少カラス
満洲人ハ「ナノ」「サハリヤン」ロニ翻スル島山ヲ姑ク名テ
「サハリヤンウラアンガハダ」ト云ヒ僅ニ北辺ヲ略
知メ南方ニ至リテハ疎漏タリ本邦ノ人ハ異客ノ
来リ市フヲ以テ「カラフト」ト漫称メ其奥ヲ究メス

固ヨリ此島一區域ノ總名ナク彼ハ「サガリーン」ト
呼ヒ此ハ「カラフト」ト称シタルモノニメ其実ハ一
同島タルヿ断然タリ其元證トスヘキハ第二図及
第三図 地名ハ滿洲人呼フ所ヲト第五図ノ朱書旨
載スルモノナリ
朱書 奥地ヲ実験スルノ日滿洲人ノ呼フ所
称ス蝦夷
朱書ヲ聞テ載スルモノ又但墨書スルモノハ悉其ノ
ラフト土人ノトヲ傳セ見ルニ地名殆ト相似テ大
呼フ所ナリ
同小異ナリ今左ニ掲出閲列スコレヲ比校メ辨知
スヘシ

第五図 朱書 アデキ 第二図 阿党衣
同 朱書 イドイ 第三図 アタンヒ
第二図 衣推
第三図 イトウキ

同 朱書 テツカ 第二図 特懇
同 朱書 ラツカ 第三図 テケン
第二図 拉喀
同 朱書 ボコヘ 第三図 ラーハ
同 朱書 シー 第二図 白沽少
第三図 ポゝビ
同 朱書 ビレント 第二図 薩衣
第三図 サイ
同 滿洲朱書地方 フイロ 第二図 波倫兎
第三図 ピラント
第三図 プヨリ

コレ互ニ轉化スルモノニメ其実ハ同名タルヿ疑
ナシ コレ以テ同島ノ一正證タルヲ知ルヘシ 按ニ前年
度間宮生奉リシ北夷地実験図ニハ「ブイロ」ヲ北夷
地ノ北端ニ記スル是誤リナリ今年余ニ贈ル所ノ図
ハサンダ」人等ニ聞テ之ヲ改テ滿洲地ニ其名ヲ記
スル思フニ彼前年到リシハ「ラツカ」或ハ「ボコベ」ノ辺

アテ往テ其尽処ヲ其地形方位幅員道路村落土俗
詳ニセサルナラン
業ノ詳ノ如キハ間宮生府ノ時ヲ期スルノミ近
藤氏既ニ略刺弗土考アリ能ク諸説ヲ纂集ス務メ
タリト云ヘシ但シ其滿洲ト連接スト云モノハ非
ト云ヘシ但近時ハコレヲ改正スルノ餘考アリト
キケリ未タコレヲ世ニ「カラフト」「サハリヤン」ハ自
ミス
ラ二島ヲナスト云ヒ又同島ナリトスルモノアリ
テ衆説紛々タリトキケリ余固ヨリ其説ニ論ナシ
唯地球図新製ノ命ヲ奉シ屹ミトメ其地方ノ分
度ヲ校シ方位ヲ察シコノ考訂ノ業アル処以ナリ

巳巳秋八月述

目録

第一　校訂図

是レ景保諸図中ノ尤的実ナルモノヲ擇ヒ取テ新ニ校訂スルノ図ナリ　北端多クハ乾隆年製図ニ依リ南端ハ間宮林蔵ノ実験図ヲ主トセリ図成レハ新訂譜厄里亜版ノ「サガリイン」図ト方彿タリ彼已ニ能尽セリト云ヘシ

第二　乾隆年製図　宮本摸写図ヲ紙ス

第三　西土「ピートルホンデ」書中ニ載スル所ノ図是第二図ト全ク相同シ今是レ同一図ナレハナリ以テ此校ニ供フ図中横線ヲ施スモノハ測量セシ各地ナリ此図與第二図ノ地名ヲ左ニ倣列メ図図タルノ證ヲ明ニス

サカリヤン・ウラハタ

第二図　蒲鞆嘴山　　第三図　ブロンガイ
同　啓杜什河　　同　キトス
同　他ヽ馬河　　同　タラス
同　部多活河　　同　コドホ河
同　奴列河　　同　ヌラ河
同　厄里那嘴山　　同　正ラ

小島

第二図角即哈達　第三図　キャヲト島

同　可布特哈達　同　キフット島

サガリヤンウラ北辺

第二図　杜郎嚕達敖佛洛　第三図　トランハタオフォロ

同　無勒河　同　ウう河

同　兎乎魯河　同　トフル河

同　兌而即河　同　ウエルギ河

同　厄米勒河　同　エミラ河

同　必占河　同　ピサン河

同　羊山　同　ヤム山

同　格林河　同　ケリン河

同　多素米河　同　トソミ河

同　冨打礼他拾哈　同　フタリ河

同　汪達山　同　ワンタ山

同　枯魯河　同　クル河

同　乞母尼河　同　キンニン河

サガリヤンウラ南辺

第二図　你滿嚕山　第三図　ニマン

同　寧桓里河　同　ニンニャン河

同　ヒチ　ヒ乙ノ嚕山

同　ヒラシュム河　喜拉孫河

同　エキチ河　厄乞的河

同　フメル河　客莫勒河

同　センケレ河　僧厄勒河

同　ハラル河　巴拉児河

同　トンドン　墾〻噶山

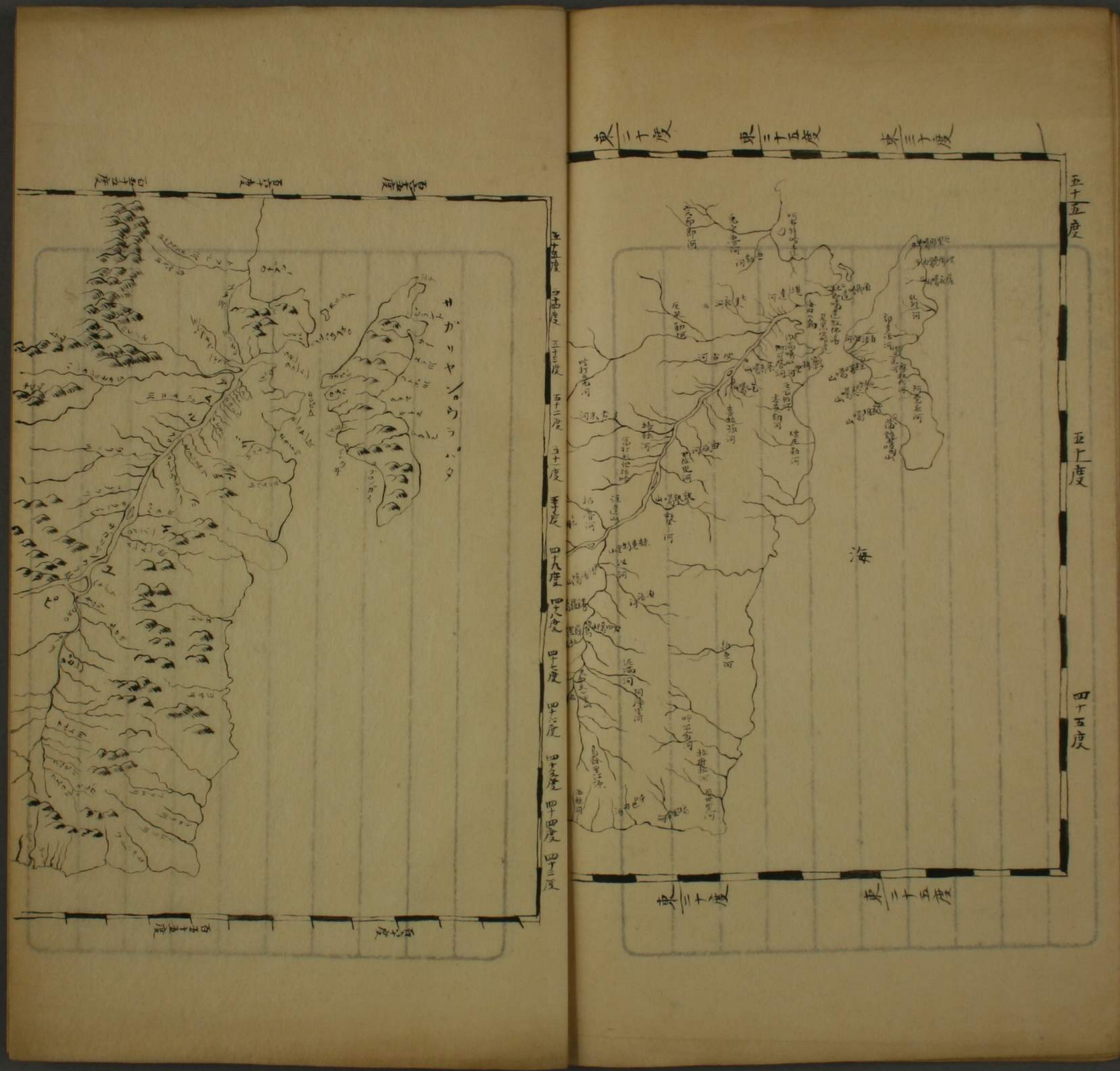
其余拏ルニ遑アラス仍テ畧ス　両図併セ見ルヘシ

第四　諸厄里亜図新訂　我安永九年庚子　製図

第五　間宮生実験図

文化五年戊辰春間宮林蔵　命ヲ奉メ北蝦夷地ニ至リ実験自製図並ニ其冬再命ヲ奉シ同地ニ至リ聞見ノ図考説ヲ其途中「トンナイ」ヨリ景保ニ送ル　此両図ヲ併合メ此図ヲ作ル　図中満洲地ルモノ位置誤ナリ　第二ノ図ヲ見ルニ黒龍江東岸ニアリ「カマヲタ」ハ第二図ノ落莫勒ノ訛又子キトム」ハ厄乞的ノ訛ニメ位置亦誤ナラン歟

亜里百西
ヨホツカ
ヨホツカ海
カラフト島
ヤセヤツカ
紅日本
南部
南


五十五度
五十度
四十五度
四十四度
四十三度
海

カラフト島
マンチー地方
蝦夷
東
南
海カツホツ
ツヨカ一名
サガリイン島
カムシアトカ
諸島
日本